



「言葉」を分析することの意義と その留意点

牧野 智和

(大妻女子大学准教授)

I はじめに

社会では日々、さまざまな言葉が生まれ、新たな意味を獲得し、それらのあるものはより多く使われるようになり、あるものは使われなくなっていくというプロセスがつねに進行している。筆者に与えられたテーマは、こうした「言葉」に注目することの意義とその手法についてである。

このテーマについてより精密に論じることのできる方は他にもあろうかと思うが、筆者に寄稿依頼が来たのは、労働や教育、人間形成などに関して節操なく流行り言葉を追いかけてきたという、研究対象となる言葉の分かりやすさやハードルの低さにあるのだと思う（ただ、研究対象のハードルが低いことと、研究そのもののハードルの低さには関係がない、むしろ上がるかもしれないのだが）。今までとりあげた研究対象を振り返ってみれば、少年犯罪報道における「心の闇」（牧野 2006; 2016）、就職活動のマニュアル本や自己啓発書によくみられる「本当の自分」（2012）、行政文書から各教育機関のポリシー、書籍や雑誌までに広がる「人間力」（2014）など、確かに実に節操なくとりあげてきた。思いつきで研究をしているのではないかと受け取られても仕方がないのだが、しかし筆者は、そのような「思いつき」で浮かぶほどに流通している言葉こそ、現代社会を考えるための素材

として有用なのではないかと考えてそのような言葉を追いかけてきた。

ただ、多く流通する言葉であればあるほど、そうした言葉の含意や、言葉の流通を下支えする文脈は冷静に、丁寧に行わねばならない。紙幅の関係上、精密な議論を展開することはできないが、言葉を実際に分析するにあたって考えておいた方がよさそうなことがらについていくつか並べつつ、そのなかで言葉を分析することの意義についてももう少し付け足していきたい。

II 「語られたこと」の水準それ自体に注目する

言葉に注目した分析、特にその社会学的な分析についての大きなルーツとしては、知識社会学や言説分析、内容分析をさしあたり考えることができる。これらのうち、知識社会学（あるいは内容分析）と言説分析は対立的に考えられることが多い。たとえば、前者は分析単位を言葉それ自体とし、その意味付与のされ方を階級構造や権力構造といった言葉の外部から、客観的に説明しようとするが、後者は意味を関係的なものとして捉え、何が分析単位（言表）となるのかもあらかじめ確定できず、分析対象に関する全体性や客観性を措定することはできない、というように（佐藤

2006：7-15など)。

「言説分析」をめぐる論争も展開され、さまざまなことが論じられてきたが(佐藤・友枝2006など参照)、筆者にそれらの論点を受けきる能力はない。だが、筆者は言葉に注目することの意義とその手法について執筆を依頼されている。そこで以下では、「言説分析」の困難をめぐる議論があることは知りつつも、実際にそれに関するような分析を行うとして、何が研究者自身の、あるいは研究成果を読む人にとっての考えどころになるのか、これまでに積み重ねられてきた研究成果から振り返って考えてみたい¹⁾。こうした考えどころについて、今日でも多くのヒントを与えてくれるのはやはり、言説分析に関する「原典」ともいえるミシェル・フーコー『知の考古学』(Foucault 1969 = 2012)であるように思われる。以下ではフーコーの議論を手がかりにしながら、そのインパクトがほぼ過去のものとなった今日の研究状況に即してやや広げて展開するかたちで、言葉の分析のあり方について考えていきたい。

フーコーは同書において、従来の歴史学や思想史が自明視する起源、進化発展、外的葛藤、主体といった観点を前提とするのではない、「言説的出来事」そのものを記述する営みについて述べ、自らが1960年代に手がけた諸作業への輪郭を与えた。ごく簡単にいえば、「語られたこと」の背後に創造的な天才、あるいは無意識や社会構造といった起源をまず措定して考えるのではなく、「語られたこと」が一つ一つ積み重なり、ある程度まとまった自律的領域をなして展開・変転していく、他に還元できないその固有の「出来事性」(遠藤2000：56)とその秩序に注目を促したのである。その注目のポイントについて具体的に表現するならば、たとえば次のようである。ある言葉とある言葉だけが、もしくはある言葉の一まとまりのセットが、他ではみられない独特のあり方で結びついているのはなぜか。ある言葉の語られ方やそのまとまりには独特な偏りや散らばりがあるのはなぜか。そして、新たな言葉やそれらの新たな結びつきがどのように生まれてくるのか。

フーコーがもたらした影響をこの紙幅内で総括することはできないが、その影響が比較的早くか

らかたちになり始めた国内の教育(社会)学についていえば、同時代的な「(近代)教育的なるもの」の繁茂もしくは弊害という認識、社会史的アプローチへの注目、フーコー受容と関連しつつもやや後続して起こる「社会構築主義」の席卷といった諸文脈のなかで、その知見の消化・応用が1980年代半ば以降に進んだといえる。そのなかで「語られたこと」の喚起力、具体的にいえば教育に関する人々のリアリティを構成する作用についての議論と研究が蓄積されていくのだが、それは「語られたこと」の記述に専心する研究と、それに外在する諸条件を重視する研究の双方を——そのなかでは「知識」や「言論」と呼ぶべきようなものも言説の分析とされながら——積み重ねることになり、論争が後に展開されることになる(佐藤1998；遠藤2000；赤川2001などを参照)。

論争の軍配を筆者があげることは到底できないのだが、批判・戒めにもかかわらずさまざまに「語られたこと」の分析が積み重ねられてきたことを現時点から振り返ってみると、それらは「語られたこと」に注目していることは間違いのないにしても、その位置づけについてはバリエーションがあり、それぞれの位置づけには一定の理由があるように思われる。

Ⅲ 「語られたこと」をめぐる諸関係

フーコーは『知の考古学』のなかで、「語られたこと」そのものを記述するにあたって、(1)「語られたこと」のまとまり内部での言葉の相互の関係、(2)「語られたこと」のまとまり同士の関係、(3)「語られたこと」とは全く別の種類の出来事(技術的、経済的、社会的、政治的な出来事)との関係という三つの観点を示している(Foucault 1969 = 2012：58-59)。既に説明がくどくなりつつあるので、以下では(1)を言説内関係、(2)を言説間関係、(3)を言説外関係とし、また(1)で示されている一つ一つの言葉——もう少し説明を足しておく、他の言葉との特定の結びつきが発生するような機能的単位としての言葉——を言表、そのように特定のかたちで結びついた言葉のまとまりを言説として以下の議論を進めたい。

さて、言説の分析においてそのスタンスを大きく分けるのは、言説外関係の取り扱いである。つまり、ある言葉やその特定の結びつき方が出現・定着することの「背景」をどう考えるのかという問題である。筆者自身は言説外関係よりも言説内関係に傾注して分析を進めることが多く、そのことに批判的コメントをいただいたことは何度もある。一方、言説外関係に重きを置く教育言説の分析、あるいは言説の背後にある権力関係をこそ考察すべしとする批判的言説分析（CDA）などについては、それは果たして言説に真に注目した分析といってよいのか（知識社会学とどう違うのか）、批判的な解釈枠組が所与の前提になっているのではないかと論難を受けることになる。どのようなスタンスをとるにしても、ゼミ、研究会、学会などにおいて言説外関係の扱いは議論のポイントになりやすいところだと思われる。

しかし、これまでに積み重ねられた諸研究を振り返って眺めるに、そのスタンスそのものはどちらでもいい（としか、結果的にはいえない）ように思える。重要なのは、研究対象となる言葉の分析に際して、スタンスをア priori に導入せず、言説的出来事を最もよく記述できるスタンスを選んでいるかということではないだろうか。フーコー自身、「言説的出来事が繰り返される空間を純粹なかたちで出現させること……それは、そうした空間をそれ自身の上に閉じることではない。そうではなくて、それは、そうした空間の内と外に諸関係の作用を記述する自由を、自らに与えることなのだ」（Foucault 1969 = 2012 : 59）とも述べている。だから極端な話、この事例についてはどう考えても言説外関係の影響が相当に強いとみて、いわゆる言説分析から知識社会学的なスタンスに鞍替えすることもあってよいように思われる。

言説外関係をどの程度考慮すべきか、またどのように記述すべきかもまた研究対象次第だと思われる。筆者のこれまでの研究を事例にしていえば、「自分らしさ」という言葉が出現し、女性の生き方のあらゆる面と結びつけて語られるようになるプロセスについて調べていた際、1960年代までの生き方論には「自分らしさ」という言葉は

まったく登場せず、専ら女性解放や「愛」「青春」といった観点から女性の生き方は語られていた（牧野 2015 : 148-149）。このような語られ方の状況を解釈するにあたっては、当時の女性解放運動（や「青春」をめぐる言説）との関係を考えざるを得ないはずだ。だが1970年代後半に、女性解放などについて一言も論じられることなく「自分らしさ」と女性を結びつけた言表が登場し、その後、どのような状況にあるどのような人物であっても同様に心理主義的な「自分らしさ」が自明視されるような言説空間が出現した時期に焦点を当てるのであれば、言説外関係をそこに読み込むかどうかは解釈上のオプションの問題になるのではないだろうか。つまり、言表そのものには表れていないが技術的、経済的、社会的、政治的な出来事をそこに読み込んでいった方が説明力が高いとみるのか、言説外からの読み込みは言説の様態と必ずしも相応しない解釈の外挿だとして、言説内・間関係を掘り下げの方が妥当だとみなすのか（筆者はこのとき、後者を選択した）。

関係を記述するにしても、それを因果の関係として示すのか、因果ではないものの一方の存在がもう一方の存在を出現させる前提条件になっているのか、相互影響関係にあるとみるべきなのか、いくつかのバリエーションがあるだろう。前提条件という場合でも、ある社会的出来事が言説の出現条件になっているが言説内関係にまで影響を及ぼしていない、ないしは影響が弱い（いわば言説空間が自律的に展開しているようにみえる）とみる場合と、言説内関係にまで微細な影響を及ぼしているとみなせる場合など、関係のあり方にもさまざまなバリエーションがありうる。また、言説外との関係づけ自体が観察できることもある。筆者が近年取り組んでいるオフィスデザインや学校建築の動向を例にしていえば、それらに関する技術的・物理（空間）的革新はつねに言葉として表現され、非言説実践と言説実践との連動が企図され続けてきたようにみえる（牧野 2018 など）。さらに、同一の言葉やテーマを扱っていても、時期によってその関係性が変容することはありうることだろうし、先行研究の欠落点を突くために、考慮されていない関係についてあえて記述するという

こともあるだろう。上述したフーコーの「諸関係の作用を記述する自由」という言及を再度考えるならば、こうした諸関係について、研究目的や研究対象に即して最も妥当な記述を柔軟に行っていく方が、より意義深い知見を生み出す可能性が高いのではないだろうか。

IV 発明・先駆者・画期

フーコーは自らが行ってきた「考古学的記述」について、「最初の言述と、数年ないし数世紀の後にそれを多少とも正確に反復する文とのあいだに、いかなる価値のヒエラルキーも打ち立てず、ラディカルな差異も設けない。……考古学は、発明を探し求めたりはしない。誰かが初めてある種の真理に確信を持った瞬間に対し……考古学は無関心なままにとどまる」(Foucault 1969 = 2002 : 272-273) と述べている。先駆者であろうが、その「最も独創性に乏しい彼らの後継者」であろうが、同じやり方でなされる言説実践とその規則に主たる関心を寄せるということについてはそうあるべきだと筆者も思う。だが、それらを具体的に記述していくにあたって、発明や先駆者、ひいていえば画期についてどう考えるかは、実際に行われた言説の分析を今日眺め直してみると、これもオプションの問題になっているように思われる。

再度筆者の研究を振り返ってみれば、たとえば少年犯罪報道における「心の闇」という言葉は明らかに1997年の神戸・連続児童殺傷事件に関する6月29日の読売新聞記事「憎悪潜む“心の闇”教育現場に戦りつ」に端を発し、それが翌日から始まる朝日新聞の連載記事「14歳『心の闇』緊急報告 児童殺害」へとつながり、以後新聞各紙や雑誌等に拡がっていく展開をとっている。しかし、この「心の闇」という言葉がそれまでの小説・映画評における一つの紋切型から脱して独特な意味をもつようになったのは、事件に先行して始まっていたオウム真理教の教祖・麻原彰晃の裁判報道においてであった。あるいは、「人間力」という言葉についても、1980年代から散発的に、特に決まった用法もなく発されていた状況が、若者バッシングや学校・職場での改革などと結びつ

けて用いられるようになったのは明らかに2003年の内閣府・人間力戦略研究会の報告書が画期となっている。さらに自己啓発(ここで例にしているのは「片づけ」論)に関していえば、ベストセラーが画期になっている場合もあれば、ベストセラー以前に新しい言表問のまとまりが生まれており、あるベストセラーがそれらをうまくパッケージ(「断捨離」や「人生がときめく片づけ」など)として示したことで追随者が陸続するような場合もある。またどのような事例についても、発信者自身がそれ以前の(言説)状況に対しての見立てを行ったうえで、それとは異なる見解を表明して自ら画期をなそうとすることがある(それは成功する場合、失敗する場合の両方があるのだが)。

分析対象の時間幅を狭く定める、あるいは考慮しないとして、言説の規則自体に傾注するのであれば、こうした画期はさして気にせずに済むかもしれない。あるいは上述したような、どのような状況にあるどのような人物であっても同様のことを語るような時期の記述についてもそうかもしれない。だが、「〇〇の誕生」に安易に墮してしまうことはよくないことではあるだろうが、継起を追いかけ、発明や先駆者、画期について記述することが必要な問題設定や対象もまたあるだろう。やはりこうした点についても、目的・対象に即した選択と、その結果行われた記述の妥当性から評価されるしかないのではないのか。

V 何をどこまで調べるか

もう一つ、言葉について調べるときポイントになるのは「何をどこまで調べるか」ということである。「同じ一つの形成システムに属する諸言表の集合」が言説だとするフーコーの見解に従おうとするととき(Foucault 1969 = 2002 : 203)、収集される言葉の範囲はそれこそ限りがないものとなる。そのため、「特定ジャンルの言説分析というものもありえない」(佐藤 2006 : 13)、「予めジャンル化された制度的言説……を対象に選択すると、まず成功しない」(遠藤 2000 : 58)、「大宅壮一文庫の検索目録でヒットすることを『客観性』の指標とするような営みとは対極に位置する」(赤

川 2006 : 117) として、既存の書籍ジャンルの活用、検索キーワードの開示による「疑似客観性」(赤川 2001 : 116) の確保で事足りれりとする態度は戒められてきた。

筆者自身、分析対象資料の説明に際してこうした表現をしてきたところがあるので、論争の成果を汲み取ることができていないことに反省しきりではあるのだが、ただ、こうした既存のジャンルを活用すること、データベース検索を行うこと自体が戒められているわけではおそらくないだろう。言葉を分析しようとする際、その偏りや散らばりはあらかじめ分かっているわけではないので、初発の手がかりとしてそうした活用・検索を行い、そこで得た資料を読んでいくなかで、さらにどのあたりに言葉が多く散らばっているか(資料があるか)、継ぎ足していけばよいということのはずだ。この際、新たな検索キーワードが得られるということもあるだろうし、ある人物に鉅脈を見出してその著作を一通り読んでみる、ある雑誌がどうも震源らしいとみなして読み込んでいく、といったさまざまな展開がありえるのだが、こうした継ぎ足しのプロセスは論文上では表現しづらいことがある。論文化される際には、〇〇と△△と××でキーワード検索を行った、と最終的な検索ワードをただ並列してしまうしかなかったり、論文上の「客観性」の確保に際して、「鉅脈感」によって継ぎ足された資料の説明はなかなか難しいところがあるためだ(「その他関連資料」のようになりがちである)。言葉の結びつき、偏り、散らばりについての勘所を得るべく、書店や図書館の当該ジャンルの付近を数ヶ月にわたってうろついていたことなどは学術的な書き物のなかに書きようもない²⁾。

また、ただあれもこれもとなって議論の收拾がつかなくなることを懸念して、より端的な資料、つまりある言葉について散発的に、気まぐれに言及するような類の資料を外し、その言葉を正面切って取り扱っている資料に絞り込んで、あるいはそれらを主資料として研究を行うこともある。あまりにその言説空間が広大であると考えられた場合、まわりまわって既存のジャンルの活用やキーワード検索に戻ってしまうこともある³⁾。こうして、その意味はさまざまではあるが、どう

あっても部分的としかいえない資料から一体何がいえるのか。これはいわゆる、「全体性」(遠藤 2000 : 54-59) に辿り着くことはできない、言説の外部に出ることはできない(佐藤 1998 : 89) なかで一体何をしているのかという話に通じると思われるのだが、これに関しては赤川学(2001 : 90) が述べたように、「記述や予測の精度」を上げるべく「全体に漸近する過程にこそ、言説分析の可能性が賭けられている」とみることでしか、研究を進めることはできないのではないだろうか。つまり、得られた資料、あるいは主資料の時期毎の点数や著者属性等の数量化、読者層の考察などの内容的な手法と、資料内・資料間で語られたことの散らばりなどを合わせ考えていくことで、語られたことのまとまりの内部からいわば三角測量的に、自らが扱う対象の位置づけを施していくしかないのではないか。

VI 可能性と留意点

改めて、言葉に注目することの意義とは何だろうか。言葉が特定の意味をもち、互いに結びつき、あるまとまった語りの領域をときに自律的に形成することに注目するのは、意味の動物である私たち人間にとって、その意味の世界の成り立ちそのものに取り組もうとすることだといえるように思われる。言葉のあり方を包括的に、多面的に、細やかに追いかけていくこの営みは質問紙調査によって代替されるものではないし、インタビュー調査や参与観察などもまた異なった独自の意義を有するものではないだろうか。ただ、他の調査手法と言葉の分析は決して排他的なものではなく、言葉の研究から得られた知見は、人々の意味世界とその推移を探究するための仮説や解釈枠組として、質問紙調査やインタビュー調査にも通じていくものになりうると筆者は考えている。

とはいえ、言葉の分析は、述べてきたように、分析やそのアウトプットに関して気にしておいた方がよい独特なポイントや前提条件のようなものがある。殊更違いを強調するつもりはないのだが、質問紙調査やインタビュー調査にもとづいた研究は、たとえば新書のようなかたちである程度

碎いてアウトプットされてもその説得力が減じにくいように筆者には思われる。その一方で言葉の分析については、もちろんテーマの問題や書き方の巧拙があるとはいえ、留意すべき点の匙加減を間違えると、説得力が減じるどころか、恣意的な印象批評の散りばめへと一気に瓦解する可能性がある。大学での卒業論文指導においても、何らかの言葉について分析しようとする論文の指導はかなり難しい。他が簡単であるとは決して思わないものの、ある程度の説得力をもって何かがいえる(当人もそう思える)ようになってくるところまで辿り着くのにかなり苦勞する。私たち、あるいはかつての人々が知らず知らずのうちに巻き込まれている意味の世界を腑分けし、自らを構成する力線が一体どのようなものなのかを明らかにしていくことは、他の調査・分析にはない魅力と面白さがあると思ひ筆者自身は取り組んでいるのだが、取り組む人が増えてほしいとは思いつつなかなか直接薦めることは気が引ける、そんなところがある。

- 1) その意味で本小論は、赤川(2001:89)が述べる「言説分析を反証可能な経験的社会学の一手法として採用すべきである」というスタンスに沿うものとなる。
- 2) 筆者はこうした徘徊や先行研究の検討、それ以前に取り組んだ別の資料の分析結果などから、分析枠組(資料分析の見立て)をあらかじめ立てたうえで、それに関連するかたちで資料の収集・分析方針を立てていくことがしばしばあるのだが、このようなスタンスには資料外在的な分析枠組を外挿しているのではないか、枠組に落とし込んでいただけではないかという批判を受けることがある。これについてはもちろん、ただ外挿しているわけではなく資料に対する枠組の妥当性を検討し(当てはまりが悪いならその資料を諦めることもある)、枠組に機械的に当てはめるのではなく枠組自体の修正・差し替えを検討しながら分析を進めている(としかいえない)のだが、このようなスタンスをとるのは、以下で述べるような資料の際限のなさは何をもって区切りをつけるのかという筆者なりの説明という側面もある。
- 3) 本文でも述べているが、アウトプットに客観性を持たせよ

うとする営みの水面下で行われているこうした苦勞は、アウトプットそのものからは読み取りづらいところがある。脚注などでこうしたプロセスの結果資料を絞ったと説明することは一つの手段だが、スマートに説明してしまうとさしたる考慮なく切り捨てたようにも映り、匙加減が難しい。むしろこうしたプロセスを最も丁寧に聞くことができるのは、アウトプットに至る途上、つまり学会発表や研究会などかもしれない。

参考文献

- Foucault, Michel, 1969, *L'Archéologie du savoir*, Gallimard. (= 2012, 慎改康之訳『知の考古学』河出書房新社.)
- 赤川学(2001)「言説分析とその可能性」『理論と方法』16(1): 89-102.
- (2006)『構築主義を再構築する』勁草書房.
- 遠藤知巳(2000)「言説分析とその困難——全体性/全域性の現在の位相をめぐって」『理論と方法』15(1): 49-60.
- 佐藤俊樹(1998)「近代を語る視線と文体——比較のなかの日本の近代化」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会.
- (2006)「関のありか——言説分析と『実証性』」佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』東信堂.
- 佐藤俊樹・友枝敏雄編(2006)『言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』東信堂.
- 牧野智和(2006)「少年犯罪報道に見る『不安』——『朝日新聞』報道を事例にして」『教育社会学研究』78: 129-146.
- (2012)『自己啓発の時代——「自己」の文化社会学的探究』勁草書房.
- (2014)「『人間力』の語られ方——雑誌特集記事を素材にして」『日本労働研究雑誌』56(9): 44-53.
- (2015)『日常に侵入する自己啓発——生き方・手帳術・片づけ』勁草書房.
- (2016)「神戸・連続児童殺傷事件報道の再構成/再検証——『心の闇』というニュース・フレームの形成・定着過程を中心に」『人間関係学研究: 大妻女子大学人間関係学部紀要』17: 127-144.
- (2018)「オフィスデザインにおける人間・非人間の配置——『クリエイティブなオフィス』の組み立てとその系譜」『ソシオロギス』42: 56-83.

まきの・ともかず 大妻女子大学人間関係学部准教授。
最近の主な論文に「『自己』のハイブリッドな構成について考える——アクターネットワーク理論と統治性研究を手がかりに」『ソシオロギス』41(2017年)。自己の社会学、教育社会学専攻。